

# 対魔忍RPGクロスオーバー集

不屈闘志

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

対魔忍であるふうま小太郎は、毎回強大な敵と対決するが、他作品の主人公と協力して倒していく。

※1 自分がたまに考える対魔忍と他作品とのクロスオーバーです。

※2 今はジャングルの王者ターチャん♡だけですが、気が乗れば増えるかもです。

※3 誤字脱字報告は、喜んで受け付けております。

## 目 次

Chapter 1 ジャングルの王者ターちゃん  
♡

- |     |   |              |
|-----|---|--------------|
| No. | 1 | ターちゃん日本へ行くの巻 |
| No. | 2 | 暗黒の東京キングダムの巻 |

# Chapter 1 ジャングルの王者ターちゃん♥

## No.1 ターちゃん日本へ行くの巻

『ゲノム党とマリア会は、先の選挙で「バリツ！」議席数が遂にゼロになり、両党首の二条 憲政氏と十文字 篤彦氏は、この結果を受けて「ボリツ！」辞職する方向…』

五車町にあるふうま邸のお茶の間で、テレビから流れる他愛の無いニュースと共に何かを碎く音が響いていた。

「やつぱり、このちよび髭とロンゲ…『バリバリツ！』人気無いと思つてたのよね、『ボリボリツ！』

その音は、別次元から連れてこられた居候の『若さくら』が、テレビを見ながら、お気に入りである稻毛屋の煎餅を豪快に食べる音であつた。

そんな騒がしいがゆつくりとした雰囲気の茶の間に、その邸の一応の主人である『ふうま小太郎』が入つて来る。ふうまは、煎餅を齧りながらテレビを見ているさくらを見て、呆れたような顔になつた。  
「あんまり破片こぼすなよ…さくら。鶴さんがこの前、机の下がお菓子の破片だらけで大変だつて言つてたぜ。」

「ふあひふあーひ…」

さくらは、煎餅を咥えながら了解したと言うふうに敬礼した。

「一応は注意したからな…テレビ変えていいか？」

「ゴックン：いいよ！ 何見るの？ アニメ？」

「いや、この前録画した全世界格闘王トーナメントだけど？」

「またあ？ 相変わらずターちゃんのファンなんだから。私は、他の部屋でゲームしてるし。」

若さくらは、つまらなそうに他の部屋に行つてしまつた。

ふうまは、若さくらの後姿を見ながら軽く溜め息をつく。

（まあ、この前のトーナメントは、ユンケル帝国やパンピングアイアンホテルと違つて、誤魔化してるけど人が何人も死んでるっぽいしなあ。さくらは、そういうの嫌いだし…けれど、審判や一般の観客が

いる分、カオスアリーナやデモンズアリーナと比べるとまだ健全だ。  
何より女の子は、MAXのロザリー以外出てないし、あまり痛々しく  
無いんだよな。）

そう考えながらふうまは、リモコンの再生のボタンを押す。すると、テレビ画面に草の腰蓑を着た金髪の筋肉質な青年と鉄のマスクを嵌めた二mを超える大男が、リングの上で激闘を繰り広げている映像が映つた。

「なんかターキちゃんは、東京キングダムの用心棒や傭兵と違つて、あのアイアン・マスクが相手でも優しさを捨てずに戦うから、誰でもファンになつちゃうんだよなあ…おお、この動物の象形拳みたいシーンが凄いんだ。」

ふうまにターキちゃんと呼ばれた金髪の青年が、アイアン・マスクと呼ばれた大男の攻撃を動物の真似をして受け止めている。

『サイツ！「ガキッ！」ゴリラツ！「バシツ！」ゾ…「ピンポーン」カチツ…』

二人の戦闘を見ていたふうまだが、インターほんの音が耳に入ると玄関の方を向きながら、画面を一時停止させた。

「ふうまあつー！ 近くまで来たから寄つて上げたわよつ！」

「その声は、アスカか？」

玄関から響く声は、友達である米連所属の対魔忍『甲河アスカ』であつた。対魔忍と米連という違う組織に属する二人だが、仲良くなつてからは幼馴染である『相州蛇子』や『山中鹿之介』のように、アポ無しで家に来ることが多くなつていた。

ふうまは、早速アスカを玄関から招き入れ、先程までテレビを見ていた茶の間へと彼女を案内する。

「丁度、時子達は全員、用事で外に行つててさくらもゲームに夢中だから、一人でこの前の世界格闘王トーナメントの動画を見てたんだ。アスカも一緒に見ないか？」

アスカは、ふうまの一人という言葉に心のなかでガツツポーズをする。

「ほほ誰もいないんだ…ヤツタ！ フフフ、しようがないわね。男の

子つてやつぱり格闘技好きだから、ふうまのつまんない蘊蓄にも付き合つて上げるわよ。」

「おお、サンキュー！」

そう他愛もない会話をしながら、二人は茶の間にドアの前に着き、ふうまが扉を開ける。

「今、良いところで一時停止し…!?」

「へえ～良いところつてターチちゃんとペドロの師弟対…つてなんてもの見せるのよ!? この変態!」

アスカは、顔を赤面させながら左手を振りかぶる。

「待て!? これは誤解…『バシイツ！』あがつ！」

ふうまは、アスカのアンドロイドアームによる容赦ない平手打ちで思い切り吹き飛んだ。

「し、しまった…」

茶の間の大画面のテレビには、モザイクがかかっていても解る象のようないきり立つたターチちゃんの包〇の男性器がどアップで映っていた。

数分後…

「あはは、ごめんね…」

「いや…こつちも悪かつたよ。」

頬に紅葉を付けたふうまとバツが悪そうに笑うアスカは、気を取り直してテレビを仲良く見ていた。やがて試合は、アイアン・マスクがロザリードと抱き合い、そんな彼らを満足そうに眺めるターチちゃんの笑顔で終わる。

試合を見終わったふうまは、テレビをまた地上波のニュース番組に戻すと、興奮冷めやらぬといった顔でアスカに向き直る。

「ふうつ～ターチちゃんつて強いよなあ…もしかしたら、アサギ先生とは言わないけど、紫先生とならい勝負ができるかもしれないよな。アスカは、どう思う?」

「まあ、間近で見た身から言わせてもらうけど、もし戦えば私でも楽には勝てないわね。」

「間近つて…まさかアスカ!?」

自分の言葉に驚いたふうまを見て、アスカは腕を組みながら自慢気に背を仰け反った。

「ふふーん♪ 実はCIAにバツグアップを頼まれて、私と所長はあそここの島に行つっていたのよ！」

「本当かよ!? つてうか、なんの手伝いで行つてたんだ?」

アスカが所属しているDSO（米連防衛科学研究室）は、基本的に国外には行かない対魔忍と違つて、魔界関連の事件であれば、海外に行くこともあるのだ。

「本当は秘匿事項何だけど…まあ、もう解決したからいつか。いやさあ、実はあのトーナメントの裏には、MAXが支援しているケルベロスっていう組織がいてね…」

アスカは、ふうまにトーナメントのことを自慢気に話し始めた。

アスカ曰く元々MAXは、デモンズ、カオスアリーナと同じような裏の格闘団体を営んでいたこと。最初は、単に強いだけの只の人間を戦わせていただけだつたが、ノマドによる魔界の技術が流入し、改造人間を作り出すことに成功したこと。彼らを使い、表の格闘技団体制圧を目論むもターちゃんに邪魔されたこと。そして、同じく魔界の技術を悪用しようとしているケルベロスという組織と組み、ターちゃんのクローンを創り出したこと。しかし、最後にはその計画も失敗し、CIAにすべて捕縛されたこと。

「…てな感じで、もしターちゃんが敗れてたら、私が所長があのアイアン・マスクと戦つてたかもね。」

「マジかよ…どおりでMAXの選手は、普通の人間とは違うなつて思つてたんだよな。（ゆきかぜが白蓮仮面を見て、雷遁の術だわとか言つて大騒ぎしてたことは…秘密にしどこう…）

「驚くのはまだ早いわよ。押収したケルベロスのデータを見たら、ターちゃんつてエドウイン・ブラツクやカーラ・クロムウェルと並ぶ吸血鬼の真祖の一人を倒してたらしいわ。」

対魔忍の不俱戴天の敵であるエドウイン・ブラツクと同格の相手を倒したと聞いて、ふうまの顔はさらに興奮気味になるが、すぐに不思議そうな顔に変わった。

「す、すごいな…けど、何で DSO はそんな実力者であるターちゃんを仲間に誘わなかつたんだ？ 所長である仮面の対魔忍なら絶対に誘うはずだろう？」

ふうまの最もな問いに、アスカは少々残念そうな溜め息をつく。  
「一応、誘つたんだけど『悪いが私の仕事は、米連の手助けではなく、アフリカの平和を守ることなのだ。』って言われて断られたのよ。」

「そ、うか…残念だなあ～もし、DSO の仲間になつてくれたら、対魔忍との共同作戦の時に会えるのに。まあターちゃんは、元々ジヤングルの王者だから仕方ないか…」

ふうまは、残念そなうだが納得した様子で軽く頷いた。

そんな彼を見たアスカは、少し複雑な心境であつた。

(本当はその答えの前に、朧さんの仮面とコートの中の対魔スースを見て『SM の女王様なのだ！』つて、梁さん？と黒人の人とで大喜びして、隣の太つた女の人に全員しばかれたんだけど、やつぱり内緒に「そ、ういえば！」え？…)

ふうまの突然の声にアスカは、思考を中断し彼を見る。

「そ、ういえば、ネットの噂なんだけど、ターちゃんは飛べるつて本当か!? 本当だつたらどういう風に飛ぶか、具体的に俺に教…え？ 何、顔を赤く『バキヤ！』何でつ!?」

「やつぱり変態つ！」

ふうまは、まだ知らない。数日後、その憧れのターちゃんと予期せぬ出会いを果たすこと…：



それは、まだアフリカが動物達の楽園だつた頃、大陸を愛し、そこに生きる動物達を愛する一人の勇者がいた。その勇者の名は、『ターちゃん』。彼は、赤ん坊の頃に親に捨てられたが、父であるチンパンジー、母であるアフリカの大地に力強く心優しい人物として育てられる。やがて時が経ち、青年になつたターちゃんは、その性格故に、強大な敵達と悩み苦しみながら激闘を繰り広げることになる。しかし、彼のその強さと優しさに惹かれて集まつた仲間達に助けられ、危ういながらも全てに勝利してきた。

そして：

ダダダダダダダダダダダダダダ!!!!!!

アフリカの自然溢れる大地で、その場に相応しくない迷彩柄の服を着た数人の男達が、その手に持つマシンガンをライオンやシマウマといったアフリカの生き物達に容赦なく浴びさせていた。

「撃て撃て撃てえ!!!」

「やつぱり、生身の動物は良いぜえ！」

「奴が来るまえに狩り尽くせえ！」

彼らは、条約で禁止された動物を密猟し、その毛皮を売買する世界ハンター協会の者達である。ターちゃんに今まで幾度も撃退された彼らだったが、それでも懲りずに今回も動物を狩っていた。

やがてハンター達は、動物達を後一步まで追い詰める。

「ヒヒヒ、年貢…いや毛皮の納め時だな…ん？ 何だあれは？」

しかし、急に一人のハンターが真正面の遠くの方を指さした。それにつられて他のハンター達もその方向を見る。するとその先の地平線の果てから、三つの砂煙がこちらに近付いてくるのが見えた。

「「あ、あれは?!」「

ドドドドドドドド!!!!!!

その砂煙は自然現象ではなく、凄まじい勢いで迫る三人の人間の脚力で起こつたものだった。

「ジヤングルの平和を乱すハンター共！ このジヤングルの王者ターちゃんがゆるさないので！」

そう叫んだのは、草で作った腰蓑だけを着て、その筋肉を余すとなく見せつけている短い金髪の男性、『ジヤングルの王者 ターちゃん』だ。

「また、俺の中国拳法の餌食になりたいらしいな。密猟者共！」

次に叫んだのは、三人の中で一番鋭い表情をし、長い黒髪を後に纏め、顔に切傷がある中国拳法の道着を着た男性、『西派白華拳最高師範 梁』だ。

「懲りない奴らめ！ 今日は、お前らに熱いお灸を据えてやる！」

最後に叫んだのは、三人の中で一番年が若いが、溢れ出るオーラは

他の二人に少しも負けていない、短い黒髪に空手の道着を着た男性

『ターちゃんの一番弟子 ペドロ』だ。

「「クソつ！」」

ダダダダダダダダダダダダ!!!!

先程の動物に浴びせた以上の激しい弾丸の雨が、三人を襲う。

「!!」

梁師範とペドロは、素早く左右に別れて弾丸を避けた。

だが、ターちゃんだけは…

「マ、マシンガンを避けながらそのまま突っ込んで…」

他の二人と違い、弾丸を避けながらもスピードを落とさずハンターに突っ込み、パンチを放つ。

「ターちゃんつぱアーンチツ！」

バキヤ！

「ぎこええつ！」

ターちゃんの拳によりハンターの一人が、たまらず吹き飛んだ。

「クソオオオオ！」

それを見た他のハンターは、弾切れになつたマシンガンを捨て、目前まで迫つた梁師範の顔に破れかぶれの拳を放つ。

しかし、梁師範は冷静にその腕を絡めて…

「西派転身狭術！」

と流れるように肘に白華拳に伝わる関節技を決めた。

ガキツ！

「ギ、ギブアツリー！」

身悶えする隙も与えない卓越した関節技に、ハンターはたまらず大声を上げて敗北を宣言した。

「う、うわあ！」

最後に残つたハンターは、自分達が乗つて来たジープに一人だけ飛び移つて逃げようとする。

「待て！ 仲間を見捨てて逃げようとするなんて、最低な奴だ！」

「畜生！」

しかし、それより早く後ろまで迫つていたペドロにジープから引き

「ごめんなさい！」  
「さり降ろされた。

「ごめんなさい！　もう、改心してここには来ないから許して下さい！」

引きずり出されたハンターは、土下座してペドロに謝る。しかし、ペドロは厳しい顔で見下ろすのみ。

「駄目だ。さつき言つたはずだ。今日こそは熱いお灸をすると…」

そう言つてペドロは、空手着の懷から何かを取り出そうとする。

「ヒイイツツツ！　道具でお仕置きだけは勘弁して…」

ハンターの顔が恐怖に歪んだ。

一方、他のハンターを拘束しながらその様子を見ている梁師範は、僅かに驚きの表情になる。

（ペドロが、武器を使つてハンターにお仕置きするなんて初めてだ。  
あいつも相当腹にすえかねて…ん？）

ジジジジジジ…：

「ここが肩こりに効くツボで、ここが腰痛に効くツボ…」

「あああ…そこそこ…」

ペドロは、上半身裸になつたハンターにもぐさを盛り、火を付けていた。

「本当にお灸を据えてどないすんねん！」

「す、すいません。ヂエーンさんが最近、お灸に凝られているので、ついつい練習をしたくて…」

数分後、ハンター達は、縛られてターチャン達の前に座つていた。しかし、彼らは、制圧されているのにも関わらず、気丈にターチャンに吠え続ける。

「けつ！　ここでお仕置きされたつて、また舞い戻つて来てやるぜ。」

ターチャン達は、その優しさ故に動物を狩るハンター達でさえ過度な罰を与えることをしない。だが、それ故にほとんどのハンター達は、反省してる振りをして、傷が癒えればまた動物を狩り始めてしまうのだ。

「こいつ！　だつたら、もつと…先生？」

ペドロがハンターの胸ぐらを掴もうとするのを、ターチャンが止めた。

た。

「私は、これ以上ハンターであろうとも人を傷付けるのは嫌なのだ。」「しかし、先生！」

「安心しろペドロ…しつぺや握りつ屁で反省しないなら、私が昨日考えた傷付かないお仕置きを受けてもらう！」

そう言つて、ターチちゃんは後ろを向いて、ハンター達に腰を近づけた。

「な、何を…」

「新技！ ターちやーくん…大放屁！」

すると鋭い音とともにターチちゃんの尻から辺りを包むほどの大量の屁が出た。

「「あがあ?!ツツツツツツ…」」

ハンター達の悲鳴が響くとそれを最後に、辺りは静寂に包まれる。「これでこいつらも少しば懲りただろう。だからもう許してやれ、ペドロ。」

そう言つてターチさんが振り向くと、先程まで元気にターチちゃんを馬鹿にしていたハンター達は、スカンクを超える臭さのターチちゃんの屁を嗅いでピクピクと小刻みに震えて氣絶していた。

「「……」」

ついでにいきなりの新技に巻込まれた梁師範とペドロも氣絶していた。

「……」

「あ〜〜!? ペドロ!? 梁師範!? 「ごめーーーーん！」

一時間後…

「勘弁してくれよ、ターチちゃん。あんな技?をやるなら、予め言つといってくれ。」

「そうですよ、先生。」

「いやーごめん。ごめん。」

ターチちゃん、梁師範、ペドロは、目が覚めたハンターを逃した後、自分達の家へと歩いていた。

「けれど、やっぱりターチちゃんはこの仕事の方が生き生きとしてる

な。」

「先生は、十円ハゲを作りながら苦しんで戦うよりも、アフリカで生き生きと動物達を守る方が向いてますよ。」

「もーペドロ、十円ハゲのことは言わないでくれよ。」

「「あははつ！」」

にこやかに笑う三人。

しかし、もうすぐ家が見えてくる距離になると、ターキちゃんの表情が変わった。

「あれ？ なんか家の近くに何かあるのだ？」

「あ、先生！」

「待てよ、ターキちゃん！」

ターキちゃんは、視力5.0の目で家の近くに止まる何かを捉えると家に向かつて走り出した。

やがて家が近付くにつれ、その何かの全貌が見えてくる。

「あ、あれは？」

それは、一台のセスナ機だった。

「あ、ターキちゃん大変よ！」

「ウキウキ！」

ターキちゃんの驚きの声に相撲取りの様に太った女性と一匹のチンパンジーが家から慌てて出てくる。ターキちゃんの妻である『ヂエーン』とターキちゃんを赤ん坊の時に拾つて育てた『エテ吉』である。

そして、その二人の後を追うようにある人物も家から出て来る。

ターキちゃんは、その人物を見てさらに驚きの表情になつた。

「あ、あんたは…」

その人物は、かつて自分の実の父と名乗つたアレクサンド・コーガンであった。

すぐに梁師範とペドロがターキちゃんに追いつき、ターキちゃん一家が集まる、アレクサンドは泣きながら話し始めた。

「ターキちゃん、助けてくれ！ リサが攫われたんだつ！」

「「な、何だつて!?」」



十時間前、アレクサンド・コーガンが経営しているパンピングアイアンホテルの地下格闘場。何百人といる観客が観戦する中央の四角いリングの中で、二人の女性が戦っていた。

「ハア…ハア…」

肩で息をしているのは、清楚な雰囲気を思わせる白いレオタードのようないングコスチュームを着た長い金髪の美女。

彼女は、コーガン家の長女『リサ・コーガン』。

「フフフ…♪

そのリサと対面して薄く笑みを浮かべているのは、年頃はリサよりもふたまわり上、リサの白いリングコスと相対するよう派手な銀蒼色のリングコス、青みがかかった緑色の髪と金色の瞳、そして、目元を隠すマスクをしてわかる妖艶な美女であつた。

マスク美女のリングネームは『スネークレディ』。

彼女は、パンピングアイアンホテルの試合場に彗星の如く現れた新人選手であつた。主に大衆受けするような派手なプロレス技とサブミッショントルクを使い、さらにその美貌で、人気を博し、僅か数試合で女子格闘技のチャンピオンであるリサに挑戦してきたのだ。

「リ、リサッ!?」

主催者専用の観戦室で、張り付くようにアレクサンドは、試合を見ていた。

アレクサンドは、試合前はリサの圧勝だと思っていた。僅か数試合見ただけだが、スネークレディはよくいる関節技が得意なプロレスラー程度だと思つていたからだ。

そして、それはリサも同じであつた。

（あ、甘かつた！　こいつ、他の試合では実力を隠していたんだ！　いや…というよりも他の選手相手には差が有りすぎて、実力を見せる必要が無かつたんだわ！）

スネークレディの攻撃に、リサは防戦一方であつた。スネークレディは、パワーはもちろん、スタミナ、耐久力などあらゆるものがありサと比べ物にならず、何よりも蛇のように絡みつく関節技は、一流を超えて芸術の域までに達しているようだつた。

「頑張つていたようだけど、これで終わりよ…♪」

「え、  
消えた!?」

スネークレディは、どう攻めるか考えていたリサの一瞬の隙を付いて眼の前からいなくなる。

来ない。

ーとどこに?

!?

リサが背後からの声に反応する前に、スネークレディの両手が、彼女の首に蛇のように絡みつく。

卷之三

そして、流れるような裸締めで、リサは抵抗する間もなく一瞬で落とされた。

カンカンカンカンツ!!!

く。

「ソルジャー、お前はまだ戦闘訓練を受けた事ないんだ？」  
ソルジャーはうなづいた。  
「ソルジャー、お前はまだ戦闘訓練を受けた事ないんだ？」  
ソルジャーはうなづいた。

その様子を見た顧客達の目には、刀ネークレティカリサに敬意を  
払つて、自ら医務室に連れて行く尊い行為に映つていた。

だが、スネークレーデイの顔は、相手に敬意を払つて いるような顔で

「二の娘、多分処女ね♪ カオスアリーナでまた勝負した時  
はなく、獵物が手に入れた喜びは溢れる残酷な顔であった

だわ♪ その時は、その大切に守つてきたそれを私が……あら?」

しかし、リサを抱えて廊下を歩くスネークレーデイの前に、二つの影

「待てよ、そつちは医務室じゃねえぜ。」

「妹は、兄である私達が受け取ろう。」

「…へえ」

一人は、長い金髪の勝ち気そうな雰囲気溢れる青年、コーガン一家の一人『マイケル・コーガン』。そして、もう一人は、黒髪で顔はその兄に似ているが、落ち着いた雰囲気の青年、彼はマイケルの弟『マット・コーガン』だ。

二人はリサと同じく、このパンピングアイアンホテルのスター選手であり、ターチちゃんや改造人間相手以外なら負けたことがない実力者であった。

「あらあら、スター選手が一人も…これは光榮ね♪」

しかし、そんな実力ある一人を目の前にしても、スネークレイの表情は、恐れや焦りといった感情が見えない。

「心配しなくても大丈夫よ♪ 私は、医務室じゃなくてロツカールームで彼女を休ませたかつただけなの♪ 貴方達、女子のロツカールームにまで付いてくる気？」

スネークレディは、構わずにリサを抱えて一人の間を通ろうとする。

しかし、そんな場に、マイケルとマットとは違う男の声が響く。  
「待て…スネークレーデイ…」

声が途切れると同時に廊下の角から、東京キングダムやヨミハラに巣食つている何人のオーケや鬼族の傭兵達が宙を舞つて、スネークレディの目の前に積み上げられた。

「「ロド兄さん！」」

出てきたのは、短い金髪で鋭い目付きをしているが冷静な雰囲気を匂わせる、マイケルやマットより年上の男性。彼は、かつてをコーガン一家と敵対していた、マイケル達の腹違いの兄『ロド・ソドム』である。しかし、現在は和解し名を改めてコーガン一家に入り『ロド・コーガン』と名乗つている。

いきなり現れた口ドを見て、今まで余裕だつたスネークレディの表

情が、わずかに真剣味を帶びたのが、マイケルとマットにはわかつた。

「へえ♪ 流石、元MAXN。1のロド・ソドムね♪ 改造されてなくとも、そこいらのオーラクや鬼族じや相手にならないか：」

「俺を知つてゐるのか？ 東京キングダムカオスアリーナの主であるスネークレディ：いや、カリヤ！ ミスターQから聞いたことはあつたが、そんな裏の大物がまさか、表の舞台に出てくるとは思わなかつたぞ。」

鬼気迫るロドをして、カリヤは慌てずにゆつくりとリサを壁近くに横たわらせた。

「最近、アリーナもマンネリ氣味なの。対魔忍や米連といった裏の娘達を連れてくるのもいいんだけど、最初から有名な表のスター選手を連れて來る方が、客入りも良くなると思つたのよ。」

そう言つて、カリヤはゆつくりと三人に向かつて構えを取る。

「笑わせるぜ。俺達三人を同時に相手するなんてな。」

「いくら、リサを倒したとはいえ調子にのるなよ。」

「俺達を相手にして勝てるのは、この世で俺達兄弟の長男だけだ。」

「フフフ：いいわよ♪ 坊や達からかかつて来なさい♪」

「「ウオオオオツツツツツツツツ！」」

その数分後、彼らの父親であるアレクサンド・コーランは観戦室から出て、リサの元へと急いでいた。

「リ、リサ！」

しかし、アレクサンドが、試合場近くの廊下に付くとそこには恐るべき光景が広がっていた。

「うう…」

「が、体が…」

「く、クソ…」

自分の自慢の息子達が、三人共苦しみながら廊下に横たわっていたのだ。周りには、トーナメントの関係者や医者が大声で指示を与えている。

「マイケル!? マット!? ロド!？」

急いでアレクサンドは、三人の元へと駆け寄った。

三人の体に外傷は、目立つた見当たらない。しかし、彼らの肌は、段々と薄黒くなっている。

「三人共、どうしたんだ!?」

アレクサンダーの問いにロドだけが苦しみながら答える。

「ス、スネークレディの…正体は…と、東京キングダムカオスアリーナの主、カリヤだ。リ、リサは、そいつに攫われた…」

「な、何だつて!?

アレクサンダーは、すぐにカリヤを追おうと出口に向かおうとするが、それをロドが震える手で止めた。

「お…追つても無駄だ。あいつには、毒操る力がある。その能力の前には、俺達三人がかかつても余裕綽々で……ご、ご覧の有様だ。あいつには、警察を使つても止められない。」

「じゃあ、どうしたら!?」

「い、行き先は、おそらく東京キングダムだろう。し、しかし、奴の本拠地に行き…うつ!? カリヤを倒し、リ、リサを取り戻せるのは、この世で唯一人。俺達の尊敬するに、兄さんだけ…『ガクツ…』

「ロドオ!?



「信じられねえ…一人の女があの三人を同時に相手して、しかも数分で倒してのけるなんて…」

「もしかしたら、その女性は、改造人間やヴァンパイア戦士とは比べ物にならないほど強いのかも…」

コーガン一家の実力を、文字通り痛いほど知っている梁師範とペドロは、背中に冷や汗をかく。

「あの三人は、まだ毒で苦しんでいる。医者曰く手作りの毒で、解毒するには毒の作成者の協力が必要らしい」

涙を流しながら、事の次第を語り終えたアレクサンダーは、ターチャン達に土下座した。

「た、頼む。ターチャン！ わしの全財産をあげてもいい！ 日本の東京キングダムに行つてリサを取り返し、スネークレディから解毒の方法を聞き出してくれ！」

土下座するアレクサンドをターちゃんは、優しく顔を上げさせた。

「た、ターちゃん…」

「血が繋がっていないのを分かつていながら、私をまだ兄と呼んで慕つてくれたマイケル、マット、リサ、ロドを見捨てるなんて、私には出来ないのだ。」

「じ、じやあ…」

「初めてだな日本へ行くのは…」

「日本は、空手の発祥地ですから腕が鳴りますね。」

「東京見物、一度はしたいと思つていたのよね。」

「ウキウキ（日本猿でカワイイ娘いると良いな）」

ターちゃん以外の者達も、後は任せろつといった笑顔でアレクサンドを見ている。

「み、皆さん…有難う…だが、気を付けてくれ。東京キングダムは、日本の領地でありながら、各国のならず者が集う法律が通用しない治外法権都市でもあるんだ。」

「東京キングダムだろうが、黒部ダムだろうが関係ないのだ！ みんな！」

「「「「「いざ日本へ（ウキキ！）！」！」！」

ターちゃん一家は、地平線の向こうを指さした。

「皆さん、そつちは日本じゃなくて南極ですけど…」

「ドタッ！！！」

そして、全員仲良くズツコケた。



ターちゃん達がセスナ機に乗つて、日本へ向かつた数分後…

ひと目で高級車とわかる派手な車が、ターちゃんの家の前に止まり、運転席から豪華な服を来た黒人の男が降りてきた。

「ターちゃん！ 日本に東京キングダムっていう凄い歓楽街の島があつてさ！ これから梁ちゃんやペドロと一緒に男だけでその島に行つて、MAXとケロベロスの祝勝パーティーを…あれ…」

## N O. 2 暗黒の東京キングダムの巻

五車学園の校長室…

「蛇子が攫われたんですか!？」

対魔忍の頭領である伊河アサギが目の前にいるのにも関わらず、ふうまは大声を上げた。

「そうよ。一緒にいた山中君によれば、貴方の家に向かう途中でフルストが現れて、いきなり攫われたらしいわ。」

フルストは、『裏切りの対魔忍 甲河朧』や『魔界騎士 イングリッド』と並ぶ魔界随一の魔術を使うノマドの大幹部の一人である。「ごめんっ！ ふうま！ 僕が付いていながら蛇子が攫われるなんて！」

アサギの近くに立つ背が低く一見すれば美少女にしか見えない少年、蛇子とふうまの同級生である山中鹿之介は、泣き腫らしながら土下座をする勢いでふうまに頭を下げる。

そんな泣いている鹿之介をふうまは、優しく頭を上げさせた。

「鹿之助、お前の責任じやないとまでは言わないけど、あのフルストが襲つて来て、お前まで攫われなくて良かつた…」

「ふ、ふうまー！ ありがとう…」

鹿之助は、泣きながらもお礼を言う。

ふうまは、鹿之助を慰めると再び厳しい顔になり、アサギに向き直つた。

「アサギ先生、今の状況を教えてもらえませんか？」

「解つたわ…」

アサギ曰く、蛇子が攫われて数時間後、学園に蛇の使いと名乗る者から連絡があり、その連絡によれば蛇子は東京キングダムで囚われの身になつており、ふうまを名指してそこに呼び出していること。すぐに救出部隊を結成したいが、今現在動けるのは、ふうまが隊長をしている独立遊撃部隊しかないこと。

「…ということよ。」

「どうする？ ふうま？」

「分かりました。 そうなれば…」



東京キングダムは、元々は日本政府が臨海副都心に次ぐ都市を作ろうと開発を進めていた人工島だった。しかし、予算の問題や戦争で開発は中止し、いつの間にか、当初とは真逆の裏世界の者達が集う欲望渦巻く治外法権な島となつた。

そんな島の入口で、ある四人と一匹が会話をしていた。

「なんか噂には聞いていたけど、凄いところねえ…」

元都会育ちであるはずのデーンが、珍しそうに辺りを見回す。

東京キングダムに着いたターちゃん一家は、島の入口辺りで、この街の退廃した雰囲気にたじろいで一步を踏み出せないでいた。

「アメリカのラスベガスも凄かつたけど、ここは何か妖しい感じですね。」

「しかも街だけじゃねえ：コーランの親父が言つていた通り、人間じやねえ魔界の住人つて奴がゴロゴロいやがる。」

そう言いいながら、梁師範は道を闊歩しているオークや鬼族、淫魔族といつた亜人達を少し注目して見る。

「うう、木々が生えているところが全く無いのだ。」

「ターちゃん：」

デーンは、少し俯くターちゃんを心配そうに見る。ターちゃんは、アフリカの自然で育ち、そこでずつと戦ってきた。故に長い時間自然が無い場所にいれば、元気が出なくなるという弱点があつた。「ここでウダウダやってても仕方ねえ。とにかく、カオスアリーナはどこにあるか、そちらへんの奴に聞いてみるか…」

気弱そうなターちゃんを見た梁師範は、率先して進んで行く。  
ペドロは、東京キングダムの妖しい雰囲気に物怖じしない梁師範を尊敬の眼差しで見る。

「さすが、梁師範。こういうときには、頼りに…」

「あ、あの僕ら、ちょっと外国から来てて、地理に詳しくないから、こらへん君に案内して欲しいな…つ、ついでに君のお名前なんかも…」

「え？ あ、あの？」

梁師範は、セクシーランジエリーだけを纏った娼婦の女性を照れながら口説いていた。

「どうくさに紛れてナンパしないで下さい！」  
ペドロが突っ込む。

そして、それと同時に娼婦の近くにいた客引きをしていた小柄なオーケーが、ニヤニヤと笑いながら梁師範に話しかけて来た。  
「お兄さん、この娘買うのかい？」

いきなり現れたニヤけた小オーケーが視界に入ると、梁師範はいつも鋭い顔に戻る。

「いや、違う。道案内を頼もうと思つただけだ。あんた、スネークレディが経営してるカオスアリーナってどこにあるか知つてつか？」

質問された小オーケーは、数秒間だけ怪訝そうにターちゃん達を品定めするかのように見るが、いきなりフレンドリーでにこやかな表情になつた。

「ああ、知つてるぜ。あんた達、あそこに行きたいのかい？」

「ああ。」

「いいぜ、案内してやるよ！ 兄さん達、本当にこらへんのことを知らなさそうだしな。付いてきな！」

そう言つて、小オーケーは手招きしながら近くの路地裏に入つて行つた。

「良かつたわね。親切な人？がいて、ターちゃん。  
「やつぱり見かけで判断しては行けないね。」

「ウキキ！」

「…………」

ターちゃん、ヂエーン、エテ吉は素直に、梁師範とペドロは真剣な顔を崩さずにオーケーに着いていった。

しかし、数分後：

「ちよつとあんた？ なんかどんどん道が怪しくなつてるんだけど？」

ヂエーンが言うとおり、オーケーが進んでいくうちに周りの景色は、

どんどんと薄暗く、たむろしている者達もガラガラ悪くなってきた。

「ここが一番近道なんですよ…………ククク、ついたぜ。」

やがて、ターチャン達は予想に反して薄暗く広い港の倉庫街に着いた。

「あれ、ここがアリーナなの？」

ターチャンが不思議そうに辺りを見回した。

そんなターチャンを見た小オーケは、面白そうな笑顔になる。

「ヒヒヒ、最近は東京キングダムのマップ本も出てるから、獲物が少なくて困ってたんだ。あんたらみたいな絶滅危惧種と出会えて良かつたよ。」

「絶滅危惧種つて、私達は佐渡ヶ島のトキつてこと？　まさか乱獲するのか！」

「例えが分かり難いわッ！　つまり、俺はお前らの有り金を頂くためにここに誘い込んだってこと！」

小オーケの怒鳴り声を合図に、周りの物陰からナイフや棍棒を持った大柄なオーケが三十人程現れた。

「大人しくしてれば、命までは取らねえよ。まあ、これも東京キングダムの高い授業料つてことで快く払ってくれや。」

小オーケは、案内したフレンドリーな態度の仮面を捨て、本来の性格を見せつけるように嫌らしく笑う。

「何か怪しいと思つたら、こういうことか…」

「まあいいぜ、どつちにしろ行き先は答えてもらうんだからよお。ちよつと質問の仕方が変わるだけだ。」

ただの人間なら手を上げて許しを請う場面である。しかし、ペドロと梁師範は、こんな修羅場は慣れているというふうに、会話しながらゆっくりと身構えた。

「ヂエーンとエテ吉は、そこの物陰に隠れていてくれ。」

ターチャンもアフリカでハンターと対峙したときのような真剣な顔になる。

「わかつた！　ターチャン、ボコボコにしちゃいなさい！」  
「ウキキ！」

一方、自分に従う気のないターちゃん達を見た小オーケは、笑みを崩さずに大声で叫ぶ。

「抵抗しなけりや、怪我なく済んだのによお…みんな！ やつちまえ！」

『ウオオオオオオオツツツツ!!!!』

叫び声を上げながら四方八方からオーケ達が、ターちゃん、ペドロ、梁師範に襲いかかった。

「馬鹿め…対魔忍やサイボーグでもないただの人間が、銃も持たずには俺達を相手に…え !?」

多勢に無勢で簡単に殴つて終わると思つていた小オーケだつたが、三人の様子を見ると顔色が見る見る変わつていつた。

「いくら人間より力が強くても、改造人間やヴァンパイア戦士と比べると大分劣りますね…てやあ！」

「そうだな。こいつら相手なら氣を使うまでもねえ！ オラア！」

ペドロと梁師範は、何十という棍棒やナイフを上手く捌き、体格を上回るオーケ達を次々と倒していく。

「ぐ、クソ…え？ な、なんだ!?」

さらに小オーケを驚かせたのは、ターちゃんの戦闘である。

「ターちゃん…デコピン！ ターちゃん…しつペ！ ターちゃん…握りつ屁！」

「ギヤツッ！」

「いだあ!？」

「クサアアアアツツツツツツ!!『ガクツ』……」

ターちゃんは、子供でもわかるほどの手加減をして屈強なオーケを倒していたのだ。

「な、何なんだ!? こいつら!? もういい、銃を使えつ！」

ズドン！ズドン！ズドン！

オーケ達は、ターちゃん達にナイフでは敵わないとみると何の躊躇もなく銃弾を発射した。

しかし…

「やっぱり、遮蔽物が無いサバンナよりも町中的方が避けやすいな。」

ペドロは、時には自慢の足で、時にはそこら中にあるコンテナを使い上手く避けながら、相手の銃を叩き落とす。

「三花聚頂…天花乱墜…百歩神拳つ!!」

ズドオオオツツツツツツ

「グアツ！」

「ギャツ！」

!!!!!!!

梁師範は、百歩神拳という体内の気を放つ技で遠くで銃撃しているオーケーを吹き飛ばす。

そして、その彼らの中で一番目を引いたのはターチちゃんであった。「な、何だあれは!!」

「人間じゃねえ!!」

フニフニフニフニフニフニ…

ターチちゃんは、関節や筋肉など関係ないようなゴムのような動きで弾を避けていた。ハンターのマシンガンを避けるときに使う『フニフニ避け』である。

オーケーが次々と倒れていき、戦闘はターチちゃん達に有利となる。しかし、その時だつた。

「や、やつぱりこいつら対魔忍だつたんだ。クソッどうしたら…ん!?」「いいわよ～ターチちゃん！『あいつだ！』え!」

物陰から隠れているヂエーンがうつかり顔を出し、小オーケーに見つかってしまったのだ。

「ヂエーン危ない！」

ターチちゃんが素速く助けようとするが、小オーケーがヂエーンに銃を突きつける方が早い。

「形勢逆転だな！これを見ろ！お前ら！」

小オーケーは、これみよがしにヂエーンのこめかみに銃をグリグリと押し付ける。

「ヂエーン！」

「クソッ！卑怯者め！」

「止めろこの野郎！」

ターチちゃん、ペドロ、梁師範は、小オーケーを攻撃しようとするが、小

オークが銃の引き金に指を掛けているためうかつに動くことができない。

「クツクツクツク…もし、手が滑つたりしたらこいつの額に風穴が開くぜ！ 言つとく、がその猿もだぜ！」

「ウキ…」

エテ吉も動いたら、ヂエーンが危なくなるのが解つており動けないでいる。

歯ぎしりをするターチyan達を見て、小オークは、自由な片方の手でもう一丁の銃を取り出し、ターチyanに狙いを定めた。

「念の為、手足を撃つて動けなくしてから金を巻き上げてやるぜ。だから、動くなよ～！」

「ちょっとあんた卑怯よ！」

「うるせえっ！」

ヂエーンが苦し紛れに非難するが、小オークは聞く耳を持たず、ターチyan達に弾丸を発射しようとした。

だが、その瞬間…：

「お前ら…俺達の縄張りで何やつている…」

と小オークの背後の暗闇から若い男の声が響いた。

「え!？」

背後の声に驚いた小オークは、素早く振り向こうとする。  
しかし…：

バキヤツ！

「オゴッ!?」

それより早く暗闇から拳が飛び、小オークを吹き飛ばした。

「こ…こは獣王会の縄張りだぜ…カツアゲ程度ならまだしも、銃撃してさらにそんな卑怯な真似をされちゃあな…おいっ！ お前らつ！」

「「「「はいっ兄貴っ!!」」」

複数の叫び声と共に暗闇から、数十人の者が現れた。

「「な、何だ!?」」

ターチyan達は、暗闇から出現した彼らを見て驚きの声を上げる。

何故なら彼らは、体は人間だが頭が獣の亜人だつたからだ。

「今度は、こいつらにルールを教えこんでやれえ！」

『ウオオオオツツツツツツツツ!!!』

獣王会と名乗った獣人達は、驚くターキーちゃん達を無視して、銃撃していったオークや鬼族達を捕らえ始めた。

「あいつらがここらを仕切つてるギャングみたいなもんか…」

「けれど、正直助かりましたよ。」

梁師範とペドロは、構えを解き胸を撫で下ろした。

「ヂエーン！ エテ吉！ 大丈夫か？！」

ターキーちゃんは、助け出されたヂエーンの元へと急いで駆け寄る。

「大丈夫よ。この人が…」

「済まねえな、俺達の縄張りでこんな危険な目に合わせちまって。けれど、あんたらも悪いんだぜ。いくら腕に覚えがあつても、あんな小悪党に着いてくんなんてよお。」

ヂエーンの背後の暗闇から出てきたのは、顔が狼の獣人だつた。「本当に有難う。私の妻を助けてくれて…」

狼の獣人にターキーちゃんは、頭を下げる。

「良いってことよ。俺は、ここを取り仕切つてる獣王会…の灰狼…一郎太……」

『灰狼一郎太』という獣人は、名乗るのを止めていきなりターキーちゃんの顔をマジマジと見つめだした。

「何？ 私の顔に何か付いてる？」

「もしかして、あ、あんた…タ、ターキーちゃん…か？」

「そうだ！ 私はジャングルの王者ターキーちゃん！」

自分の名前を言われたターキーちゃんは、ビシリとポーズを決めた。

「ううう…ウゥウ…!!」

「？」

「うオオオオツツツツツツツツ…!! 本物だ！ 本物のターキーなんだ！」

ターキーちゃんが名乗った瞬間、一郎太は辺り一杯に聞こえるほどの雄叫びのような声を上げた。

「あ…兄貴！ 雄叫び上げてどうしたんですか？！」

いきなりの大声に、オーク達を捕らえ終わつた他の獣人達があわて

て一郎太の周りに集まる。

「凄いぜ!! お前らもテレビで何回も見ただろ。表の世界最強のターキゃんだ!」

「ほ、ほんとだ!?」

「よく見たら、空手のペドロに中国拳法の梁もいるぜ。！」

「何でこんなところに!」

他の獣人も一郎太と同じく歓声を上げる。

そして、三人はすぐに人気のアイドルがファンに囲まれたような状態になつた。

「いやあ……こんなところに僕らのファンがいるとは…」

「なんか、嬉しいぜ。サイン? OKだ!」

「ナハハ：照れるのだ。」

緊張した雰囲気から、いきなり明るい雰囲気に変わつたため、三人は思わず笑顔になる。

だが、デエーンだけは一郎太のことを不思議そうな顔で見ていた。  
(この喜びようは…どうやらさつきの嘘つきとは、違うようね。けれど、表の世界最強つてどういうことかしら?)

「ところでターキゃん。ここに住んでる俺が言うのも何だが、何でこんな自然が無い薄汚い所に来たんだ?」

興奮が少し冷めてきた一郎太が、ターキゃんに問う。

「あんた達になら、本当のこと話をせそうだ。実は…」

ターキゃんは、一郎太にリサがスネークレディに攫われたことを話した。

最初は、面白そうに話を聞いていた一郎太と獣王会の面々だつたが、スネークレディの名が出た途端、顔付きが変わった。  
「ま、マジかよ。あんたら、カオスアリーナのスネークレディを倒して、女戦士を取り返すのか?」

一郎太は、驚く声でターキゃん達に再度問う。

「そうだぜ。その顔色だとあいつ、かなり強えのか?」

梁師範がターキゃんの変わりに答えた途端…

「止めとけ! 殺されるぞ!」

「あいつは、無理だ！」

「タ－ちゃん、死んじやうよ！’

再度、辺りは喧騒に包まれた。

尋常じやない止めろという声に、タ－ちゃんは一筋の汗をかきながら一郎太に向き直る。

「一郎太、スネークレディのことを私達に教えてくれないか？」

「ああ、わかつたぜ。お前ら静かにしろ！ タ－ちゃんが追つてスネークレディって言うやつは、ナ－ガ族っていう蛇の亜人で、一族のベスト3の実力を持つ三族長の一人だ。」

「なんでえ。たかだか、一部族での最強かよ。（アナベベレベルか…）」  
梁師範が、少し拍子抜けしたような口調になる。

しかし、一郎太は真剣な顔を崩さずに続ける。

「…その三族長は、俺が知る限りここ何千年か変わつていないらしいぜ。」

「何千年だと!? ジゃあ、スネークレディはダン国王と同じくらい生きているのか？」

ペドロが驚きの声を上げた。

「ダン国王はだれか知らねえが…ちなみにあんたら、インド神話のカーリヤって知つてるか？」

「え、『ダメだこりや！』や『次行つてみよう！』の!?」

「それはドリフターズの『いかりや』でしょ！ カーリヤってのは、紀元前1500年前に書かれたインド神話に出てくる蛇の女神のことよ！」

デエーンがタ－ちゃんの勘違いに元気良く突っ込むのに対して、ペドロと梁師範の顔が険しくなる。

「まさか？ そのカーリヤってやつが…」

「そうだぜ…そいつがスネークレディだ。あいつは人間の間では神と呼ばれて、何千年も生きてる化け物つてわけさ。だから、喧嘩を売るのは止めとけ！ あいつは、享樂的だから本気を出すことは滅多にないが、それでも俺達レベルなら楽に皆殺しにされちまう。」

一郎太は、タ－ちゃん達を真剣に説得する。

「ありがとう…」一郎太。初めて会った私達を心配してくれて…

ターキちゃんは、心配する一郎太に笑顔を見せた。

「ターキちゃん…」

「けれど、私は行くよ。攫われたのは私にとつて大切な人なんだ。」

「面白そうじゃねえか！ 神に俺の白華拳がどれだけ通じるか見せてやるぜ。」

「先生が行くなら、このペドロも行きます！」

三人は、今まで何度も修羅場をくぐり抜けてきた時に見せた力強い笑顔になつた。

「いや、しかし…兄貴!?」

その笑顔を見た獣王会の面々は、それでもターキちゃん達を止めようとするが、一郎太がそれを遮つた。

「やつぱり、あんたらテレビで見たまんまで爽やかな奴らだな…気に入つたぜ！ 直接の手助けはできねえが、カオスアリーナに着くまで、俺達が誰にも手出しを出来ないように警護くらいはしてやるよ。」「本当かい？ ありがとう！」

そして、ターキちゃん達は、獣王会の案内でカオスアリーナに向かつて行つた。道中であからさまに治安が悪い場所もあつたが、東京キングダムの一区画を支配する獣王会に誰も手を出すものは無く、ターキちゃん達は、スマーズに進むことが出来た。むしろ一郎太が、危険な地域やサービスが良い風俗店などをバスガイドのように紹介していくので、ターキちゃん達はこの時だけは、少しだけ観光気分で楽しんでいた。

「あそここの店は、淫魔族の娘が経営してて…」

「へ、へえ～っ」

「こ、これは勉強になるなあ～…」

「み、みんなかわいいのだ…」

紹介された優良店の店先にいるエルフや淫魔族、鬼族の娼婦がウインクをするたびにターキちゃん、梁師範、ペドロの三人は股間を膨らませていた。

（後でこいつら、オシオキね…そういえば…）

浮かれる三人を怒りの目で見るヂエーンだが、一郎太のある言葉を思い出した。

「ちよつと、一郎太ちゃん。聞きたことがあるんだけど？」

「なんすか、ヂエーンさん？ 僕に答えられることなら何でも。」

「倉庫街でターチちゃんが表の世界最強って言つてたけど、あれはどういうことかしら？ 知つてるとと思うけど、ターチちゃんは、何回も世界中の格闘家を集めた大会で優勝してるわ。大会には、魔界の人間は出でないけど、結構裏の世界の人達も出てたわよ？」

ヂエーンの言葉を聞くと一郎太は、また真剣な顔になつた。

「ヂエーンさん：俺達だって、ターチちゃんがそこいらのやつより強いってことは解るぜ。けど、テレビ中継されて、さらにサイボーグや遺伝子操作されていても、人間だけが出席者の大会なら、裏の世界ではあまりステータスにはならないんすよ。」

「そ、そなんだ：じやあ裏の世界最強って誰？ まさか、スネークレディじゃないでしようね？」

「…難しいな。スネークレディも最強格だが、吸血鬼の真祖の一人『エドウイン・ブラック』、獄炎の女王『アスタークト』、魔界の踊り子『ナディア』、九貴族も桁違いだしなあ。そもそも魔界のやつらは人間と違つて、誰が最強かトーナメントを開く事なんてやらないし。あ、そうだ！ 裏の世界の人間最強ならわかるぜ。」

「誰なの？ それは？」

「それは、対魔忍のアサ…」



『ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!』

種族を問わない数千人の観客達の叫び声がカオスアリーナに木霊する。アリーナの中央にある闘技場のリングでは、十代半ばを越えたくらいの緑髪のロングの少女が、複数のオーケ達と戦っていた。少女は、両手に持つ苦無で苦戦しながらも、一人、二人とオーケを倒していく。しかし、注目すべきは、その倒し方ではなく、彼女の下半身である。彼女の下半身は、タイツに包まれているが、まるで怪物のスキュラのように足が蛸になつていた。

彼女の名は、『相州蛇子』。ふうまや鹿之助と同じ、対魔忍の一人である。フュルストに攫われた彼女は、スネークレディに買われ、闘技場の女戦士として、無理矢理カオスアリーナの試合に出場させられていたのだ。

「これで最後オ！」

「ぐはあつ！」

蛇子は、自慢の蛸足で最後まで残っていたオーケーを吹き飛ばす。

『蛇子ちゃんの勝利いーー!!』

数秒後、会場内のアナウンスが蛇子の勝利を告げた。

「何だよ。つまんねえ！」

「犯される方に賭けてたのによお！」

「次こそ、頑張つて負けろおつ！」

しかし、勝利した蛇子に対しての称賛の声は、皆無であった。何故ならカオスアリーナの売り物は、賭博と凌辱だからだ。女戦士達は、賭けの対象となり闘技場で死闘を強制され、さらに敗北すればペナルティとして、観客達の前で凌辱を受けることになつている。

「ハアツ…ハアツ…」

複数のオーケーを倒し終えた蛇子は、そんな観客の罵倒が気にならないほど、体力を消耗し肩で息をしていた。

『憎き対魔忍め！ だが、次の刺客はどうだ！ 新人女戦士、パンピングアイアンホテル女性格闘王リサ・コーランだあ！』

実況の紹介と共に真正面の扉から現れたのは、誘拐されたリサ・コーランであつた。

蛇子は、無表情のままリングに立つリサを見て目を見開いた。

（リサ・コーラン!? 彼女が、こんな所にいるなんて絶対に本人の意志じゃない！ 恐らくは…）

『なお、試合で負けた方には、ペナルティとして次に行われるパーティの主賓となつて頂きます！』

実況が興奮氣味に叫ぶと、リサが出てきた扉から何十人者もの屈強なオーケーの集団が現れた。彼らは、リングを囲みながら、嫌らしい笑顔で闘技場の二人を見る。十数分後にリサか蛇子、どちらかを犯せる

からだ、

彼らの笑顔を見た蛇子の背筋に震えが走った。

（絶対にあんな奴らに犯されたくない！）  
けれどどうしよう？

数はもう蛇子だけの手に負えないし……ふうまちやん……

蛇子は、この現状を打破しようと必死に考えを廻らしているが、試合は待つてくれない。

『女の子同士、可愛らしい戦いを期待してますよ！

ダツ！

(はつ!?)

試合開始の声と共に先に飛び出したのは、リサの方であつた。連戦で疲れている上、考えを巡らしていた蛇子は対応が遅れ、背後に回り込まれてしまう。

キリリリリ

そして 蛇子は 背後からリサの有無を言わきない裸締めを受けて しまった。

（じいさー、今いれる蝶三の蝶足を引いての足を引く。束して、この裸締めを抜け出せる。）

しかし、蛇子の八本もある蝦足は、一本も動かない。

（出来ない…リサさんは恐らく無理矢理ここに連れ込まれたんだ。）

蛇子は、観客に解らない程度に締め上げる腕が僅かに緩むのを感じた。それと同時に、耳にリサの囁き声が聞こえて来た。

蹴散らせる。その隙に貴方は逃げなさい。)

をして、蛇子に裸締めをしたのだ。

蛇子は、リサがライトヘビー級の世界チャンピオンを一撃で倒す程の実力があることを知っている。しかし、それでもこの何十人というオーケ達を一人で蹴散らすのは到底無理であることも解っていた。

リサは、自分を犠牲にして蛇子を助けようとしているのだ。故に蛇子は、必死に抵抗する振りをしながらリサに答える。

(そんなことは、蛇子には出来ない！ 蛇子は対魔忍です。逆に蛇子が墨で煙幕を張るから、その隙にリサさんが逃げて下さい。)

(対魔忍ってなによ？ わからず屋ね：私は自分よりも、貴方みたいな子供が凌辱される方が嫌なのよ。)

(蛇子もです。自分が助かるなんて絶対に嫌です。)

両者共に自分が残ると主張し、一歩も譲らない。

故にこのままでは堂々巡りになると感じたりサは、あることを思いつく。

(ハア～：わかつたわ。じゃあ：ゴニヨゴニヨ)

(……：わ、分かりました。じゃあ蛇子がゴニヨニヨ)

「おいおい、仲良くし過ぎだ。」

「早くどつちか負けろお！」

「俺はもう三時間も童貞なんだ！」

ずっと組み合っている二人に向けて、リングを取り囲むオーケ達の野次が飛ぶ。すると、その野次に従うかのようにまた二人は、5m程度の距離まで離れた。

『おっと、二人ともまた試合開始の位置まで離れたあ！ 互いに仕切り直すのが目的なら、体力を消耗している対魔忍の方が不利だが：！？』

実況が喋り終わる前に、リサがいきなり頭を抱えてしゃがんだ。

『何だ？ リサがいきなりしゃがん：「ブシヤアアア」！？』

その瞬間にしやがんだリサの頭を超えて、蛇子の蛸墨がリングを取り囲むオーケの顔面に炸裂した。

「ギヤハハ、こいつとばっかりで食らって『ブシヤア！』うわあ！」

オーケ達は最初は、リサが蛇子の蛸墨を狙つたかのように見えた。それ故に回避が遅れ、蛇子の蛸墨は、周りを取り囲む殆どのオーケ達の顔面に炸裂した。

「ぎやあああ目があつ！」

「ぶつかけは止めて！」

「マニアック過ぎるうつ！」

やがて、その蛸墨がリングを一周するとオークの殆どは、顔面を黒くして目を擦つている状態になっていた。

「よし、今よ。蛇子ちゃん！」

「はい！ リサさん！」

二人の作戦とは、真剣に戦っている振りで、オークを油断させ、その隙に蛸墨をかけて目を潰す。そして、疲労した蛇子をリサが背負つて、闘技場から逃げることである。

「この野郎！ 逃がすか！」

しかし、墨を免れた数人のオークが、闘技場に登つて蛇子とリサに向かつてくる。

「クソッ！」

リサは、蛇子を背負つたまま身構えた。腕が使えない故に蹴りだけでオーク達を倒すつもりなのだ。

「こおなりやあ！ 一人とも犯してやるぜ！」

オーク達がリサと蛇子に後数血と迫つたその時であつた。

バリバリバリバリイイツツツ

「「あばばばばばは…」」

いきなり観客席から光り輝く鹿が数匹飛び出して、オークを痺れさせた。そして、その鹿と共に二人の人物が新たに闘技場に乱入する。「上手くいったなふうま！」

「ああ、タイミングバツチリだぜ！ 待たせたな！ 蛇子！」

対魔忍のふうま小太郎と上原鹿之助だ。

ふうまは、即座に痺れているオーク達を、刀の柄で殴り氣絶させる。

その二人を見た途端、連戦で疲労した蛇子の表情は萎れていた花が水を得たように一瞬で蘇つた。

「ふうまちゃん！ 鹿之助ちゃん！」

ふうまと鹿之助も無事な蛇子を見て安堵のため息をつく。

「誰なの？ この子達は？」

だがリサだけは、いきなり現れた二人を疑わしい目で見る。

「びっくりしました。アイアンホテルのリサ・コーガンさんですね。

いきなり言われても信じられないかも知れないと逃げ  
る。だから協力してくれませんか？

[ ... ]

最初こそ怪しんでいたりサだつたが、背負つてゐる蛇子の明るい表情を見ると、不思議と信じようという思いに至つた。

一  
解  
二  
たれ  
三

「よし、鹿之助！ あそここのオーラ達にもう一度バンビーノ・ストライクを食らわせてやれ！」

「よ、よし!? 溅れろつ!」

上原鹿之助は、体内の対魔粒子を電気エネルギーに変化させる異能系忍法電遁の術を使う対魔忍である。操る電力は、せいぜい静電気程度なのだが、特殊バッテリーを用いて先程のような超強力な静電気を目標に放つ『バンビーノ・ストライク』を放つことが出来るのだ。

鹿之助から放たれた数匹の電気でできた鹿は、出口に近い今だ目を擦っている数匹のオーラに直撃した。

直撃したオーラは、暗闇の中わけも分からず体を震わせる。

「解ったわ！  
でやああ！！」

「あがあ！」 バキヤ！

「アーリー」

蛇子をふうまに渡したリサは、ものの数秒で痺れたオーケを蹴散ら

した。

そして、四人はオーク達を飛び越えて出口に走つて行く。  
しかし…

「オマエラニ、ニガサナイ！」

GRURURU...  
[

逃げようとする出口の向こうから、オーガの集団とトロールの集団

が現れた。

オーガとトロールとは、知能が低い変わりに、オーケを優に超える体躯と力を持ち、性格も凶暴な種族である。特にトロールは、人肉を好む。

「ドゲえ!!」 バギヤ!

「G A A A A A A A : !!!!」 ゴギヤ!

二種の集団は、自分の進路方向にいる蛸墨で今だにのたうち回るオーケ達を、容赦なくその手に持つ棍棒で殴り飛ばしふうま達に迫る。

「クソッ！ みんな！ 今度はあの反対の出口に向つて走れ！」

ふうまは、即座にこの四人ではあの集団に楽には勝てないと判断し、方向転換して違う出口に誘導する。

しかし…

ガシャツ…ガシャ…ガシャ…ガシャ

新たに向かう出口の暗闇から、生物ではない何かの足音が聞こえて来た。

「ふ、ふうま、あ、あれはもしかして…」

鹿之助が泣きそうな顔でふうまを見る。

「…まずいな。あれは多脚戦車の足音だ…」

数秒後、ふうまの言う通り、虫のように六本の足を動かす自動車並の大きさの黒い機械が現れた。

「クーガーL AWS…あれがここ警備ロボか…」

『クーガーL AWS』とは戦闘支援のために開発された小型の多脚戦車である。人工知能などが搭載されて自律的に動き、標的を判断して殺傷する能力をもつロボット兵器。

ウイーーーン…

驚く四人を無視するように、クーガーL AWSのガドリングガンが無機質に動いた。

「危ない！」

リサは、クーガーL AWSの弾が発射される前に、蛇子を担いでるふうまと怯えている鹿之助を抱えてリングの上まで飛び上がる。

ダダダダダダダダダダダダ!!!!!!

「ぎやあ！」

「げええ！」

その一秒にも満たない後、四人のいた場所にガドリングの弾が撃ち込まれた。近くにいたオーケ数人が、たまらずに巻き添えを食らいミンチになる。

「まずいっ！ あれじやあバンビーノスパークを撃つても相打ちになる！」

ミンチになつたオーケを見たふうま達は、一瞬だけ青ざめるが立ち止まつてゐる暇は無い。四人は、残つてゐる最後の出口に急ぐ。

「待つて！」

「「!?」」

しかし、リサが率先して走るふうまと鹿之助を止めた。

「どうしたんですか？ リサさん！？」

「は、早くしないと!?」

ふうまと鹿之助は、自分達を制止したリサの顔を見た途端、目を見開いた。リサの表情が、誰にも解るほど強張つていたからだ。

「い、いる…」

リサが一言呟いたと同時に、

「どこに行くのかしら？ 試合は、まだ終わつてないわよお…♪」

暗闇の向こうから、艶やかな女の声が響いた。

「スネーク・レディイ…」

カオスアリーナの殆どのスポットライトが、出口の暗闇を照らす。するとその光り輝くライトから現れたのは、青いバトルスーツを来たスネーク・レディイこと『カリヤ』だつた。

『出たああ！！ 我らがアリーナの主、スネークレディだ！』

カオスアリーナの主が現れた途端、ふうま達と対象的に観客達は、興奮の坩堝となる。

「中々、早かつたわね♪ ふうまの坊や。本当はリサちゃんか蛇子ちゃんが、ボロボロになるくらいで来るかなつて思つてたけど♪」

「蛇子を攫つたのは俺が目的かよ…」

ふうまは、焦りを隠すように普段通りの口調でカリヤに答える。

「貴方の能力が少し気になつたから♪」

「じゃあ、俺が残るから他の人達は返してくれないか?」

「い・や。○ 目的は、貴方の能力を知ることだけど、今日は蛇子ちゃんとリサちゃんの初舞台のうえ、そこのバンビちゃんも観客受けしそうだしね♪ まあクーガーだけは、闘技場の中だけなら、発泡しないようにしていてあげる♪」

「あ、ありがと…って!! ヒイイイイ!! 俺も!!」

鹿之助は、カリヤの捕食動物のように舌なめずりをする顔を見ると悲鳴を上げた。

ガサガサッ!!!!

そして、その悲鳴と同時に目の墨をやつと拭い、怒り心頭のオーケ。股間を滾らせるオーガ。人肉を喰らおうとよだれを垂らすトロールが、次々とリングの上に上がつて来た。

「優しくしようと思つたが、もう許さねえ。手と足をバキバキに粉碎してから犯してやるぜ!」

「オ、オンナ、ナグリナガラオカス!」

「ビチャビチャ…」

凶暴な亞人達は、今度こそ逃さないよう四人を360°囲み始める。彼らの力と人数では、半人前の対魔忍数人と女性格闘家一人くらいなら、苦戦どころか一方的な斃り殺しにしかならないだろう。

「前門の虎、後門の狼より非道いなこりや…」

「こ、こうなりや、やるだけやつてやる!」

「ふうまちやん、蛇子も手伝うよ!」

「コーガン家の意地を見せてやるわ!」

進退極まつたふうま達だが、氣丈にも戦おうと身構えた。

オーケ達の後ろで、四人を見ながら薄ら笑いを浮かべてカリヤは指示を出す。

「殺すのは髪の短い男だけよ! 後は犯そうが齧ろうが、半殺しくらいなら許すわ!」

『ウオオオオオオツツツツ!!!!』

カリヤの指示が終わつた途端、オーク達は我先にとふうま達に向つて来た。

リサは、迫りくるオーク達を目に映しながら、走馬灯が駆け巡り始めた。生まれた時のこと、マイケル、マットとの運動会、アイアンホーテルでの試合、父の隠し子が三人いると聞かされた時、その長男に会うためのアフリカへの旅、そして…：

「ターチャン…兄さん…」

リサの記憶が、自分の兄弟の長男に会う場面に差し掛かつた…その時だつた。

「龍炎拳ツツツ!!!!」

ズガガガガアアアアツツツツツツ!!!!

「「「グギヤアアアツツツツツツ!!!!」」!!!!

男の叫び声とともに龍の形をした何かが観客席から飛び出し、闘技場のリングを割りながら、オーク達の大多数を蹴散らした。

「な!? 一体何が『うりやあ!』ゲへあ!!」

直後、その龍を追うように中国の拳法着を来た男が、リングに乱入し残つたオーク達を襲撃する。

「ナ、ナニモノ…『こつちにもいるぞ!』ゴボつ!」

そして、拳法着を来た男と反対側にいるオーク達のところにも空手着を来た男がリングに降り立ち、次々とノックダウンしていく。

「も、もしかしてこれは夢なの?」

リサは、自分の目の前の光景が信じられないよう立ち尽くす。

「嘘だろ!? もしかして…この二人!」

「どういうこと…ふうまちゃん?」

「お、俺も混乱しているが、まさか!?」

鹿之助、蛇子、ふうまもいきなりの光景に脳が処理出来ない。今の状況を例えるなら、応援していたテレビの中の登場人物達が、自分達のピンチを助けるために目の前に次々と現れたようなものだからだ。

一方、カリヤは、いきなり乱入してきた二人を見ても笑顔を崩さない。

「馬鹿ね♪ 誰だが知らないけどクルーガーは、闘技場に入つて来たやつにも反応するのよ♪」

ウイーン：

カリヤの言葉通り、クルード二人を狙うために動き出した。

一  
死  
本

しかし、ガドリングガンの弾倉が回転する瞬間、一人の腰蓑だけを着けた男が、今度はクルーガーに向つて飛び出してきた。

う、うそ!?

多脚戦車が人間の素手での一撃で!?

クルーガーが人間のパンチ一発で、無惨に破壊されたのを間近で見たカリヤは、先程までの薄ら笑いが消えて、驚きの表情で目を見開いた。

クルーガーを破壊し終えた腰蓑の男は跳躍し、今度はカリヤから守るようにふうま達の目の前に着地する。

「私の大切な人を傷付けさせはしないぞ！」

カリヤは、その男のマッシブな全身と服装を見てようやく正体が解つた。

「そ、そんなまさか?!  
な、何でこの男がこんな場所に!?」

腰蓑の男は、驚くカリヤの方を向いて、サイドチエストのボーズを決めながら名乗る。

「私はジヤグルの王者つ  
ターチャんつ!!!」